

## 古代日本の布生産と女性

東村 純子

(福井大学 国際地域学部)

本報告では、古代の布生産における女性の働きについて、具体像を史料（資料）から読み解く。律令体制では、日常衣料のみならず、調庸物として平織の絹、布、さらに綾や錦などの高級絹織物という、重層的な生産・収取制度のもと男女の分業が形成された。本報告では、このうち女性が主に担ったとされる、麻素材の調庸布生産に焦点をあてる。

はじめに、機による織成技術と布の規格との関係について確認する。律令国家は調庸布の長さや幅を規定したが、調布と庸布とは規格が異なる。二つの規格は、性別分業により女性はその技術を習得する、二つの系統の腰機（直状系有機台腰機／輪状系無機台腰機）に一致する。この事実を、栃木県甲塚古墳出土の機織形埴輪をはじめとする考古資料の分析に基づき考察する。

次に、調庸布の生産体制について再検討する。広幅に規定された調庸布は、郡衙を拠点とする集約的な生産が有力視される。しかし、日常衣料の需要から、民間での生産も活発であったとの見解も、一方で存在する。本報告では、布の規格と織成技術の観点から、二者択一ではなく、そもそも、調布生産と庸布（常布）生産とが区別されるものであったことを重視したい。とりわけ、常布は、日常衣料を織るために継承されてきた輪状系の腰機でも織れることが民族例との比較から推測される。とすれば、常布生産の主力は在地の女性労働であったと想定できる。

律令体制では、調庸布は男性が納めるたてまえである。すなわち、実際に女性たちが布を織ったことを語る史料はきわめて少ない。しかし、正倉院に伝来する二点の布が、「隠された労働」の手がかりとなる。一つは、「緋繩帯心布」（中倉二〇二第七八号櫃）である。墨書銘などにより、もとは那賀郡和志郷の恵我女が、出挙の返済のために納めた段規格の布で、同郡那珂郷の男性二人の貢納物（商布）に転用されたものと推察できる。もう一つは、信濃国から中男作物の芥子を入れて輸納した袋「布袋 衣四八号」（中倉二〇二第七三号櫃）である。その布幅は狭く、調庸布ではなく日常的な衣料として織られた布と考えられる。

女性たちの、腰機を用いた機織りは、長い年月をかけて身体で習得する技術である。それだけに織手の技量に左右されるのであるが、織手の身体長による制約の枠内で布幅や布長は自在に変えることができる。

常布、さらにその系譜上にある段布は、労働の対価や他の物品との交換財として機能していた。タテ社会を公式とする律令体制において、女性労働とその生産物である布は、実地で人や物をヨコにつなげる役割を果たした。本報告では、女性たちが暮らしのなかで受け継いできた腰機の技術が基盤となり、これらの布が創出されたことを考察する。

## 江戸時代祇園における舞妓と遊女の境界線

鍛冶 宏介

(京都先端科学大学 人文学部)

江戸時代の観光都市京都を代表する遊所祇園では、舞妓や芸妓、遊女が活動していた。江戸時代の遊廓・茶屋町を対象とした研究は、都市史研究やジェンダー史研究、文学研究など、さまざまな立場から、江戸の吉原、大坂の新町などの地域を中心に研究が進められているが、祇園については、史料的問題もあり、井上流や練り物などの研究があげられる程度で、主要な研究業績は、いまだ 1970 年代の『京都の歴史』である。京都大学総合博物館が所蔵する祇園町文書には、京都や近郊の少女たちが、置屋の養子となって祇園に働きにやってくる際に、その親たちと祇園の置屋とが交わした「一生不通養子娘証文」が多数残されている。本報告では、これらの史料の分析を中心としながら、祇園における芸妓や遊女について、両者の境界線にも注目して、その存在形態を、歴史研究の立場から明らかにすることを目的とする。

## 戦間期フランスの小学校教師—ダビデにみるジェンダーと信仰

前田 更子

(明治大学 政治経済学部)

1920～30年代のフランスでダビデ (Davidée) という女性名は特別な響きを持っていた。第一次世界大戦中の1916年に南アルプス地方の巡礼地ノートルダム・デュ・ローでダビデは誕生した。ルネ・バザンの小説『ダビデ・ビロ』(1912年)の主人公に魅了された7人の女性教師が、互いの交流のためにダビデと称するサークルをつくろうと決めたのである。彼女たちはバス＝アルプ県(現在のアルプ＝ド＝オート＝プロヴァンス県)の寒村で働く20代前半の若い教師にすぎなかった。しかし、彼女たちが発行した雑誌『オー・ダビデ』はしだいに多くの読者を集め、10年後にはフランス国内外に8000名の定期購読者を持つようになる。そしてダビデの活動は全国紙でも取り上げられ、下院議会において議論の対象にもなった。

ダビデと自称し、またそのように呼ばれた教師たちの特徴は、次の3点にある。師範学校出の公立小学校の教師であること、カトリックの信仰を強く持つこと、女性(多くは独身)であることである。彼女たちはライシテの学校と個人の信仰を守るために発言し続けた。1920年代のフランスといえば、政教分離が制度化され、公立学校の世俗化も完了したかに見える時代である。小学校教師の間では組合運動が盛んで、社会主義や共産主義が影響力を持っていた。他方で、カトリック教会は相変わらず、公立学校を「悪魔の学校」と断罪し、信者には私立学校を勧めていた。ダビデはその両陣営から批判されたのである。

女性をとりまく状況を見れば、第一次世界大戦を経て女性の社会進出は加速したが、その権利は限られたままだった。共和主義者とカトリックは、女性の世俗化に関しては激しく対立したが、ともに女性に「良き妻・良き母」であることを期待し、女性参政権の導入に消極的であった。

本報告では、公務員として国に仕え、信仰に生きながら、独身であることを選択したダビデたちの経験を明らかにしていく。史料には主に『オー・ダビデ』を用いるが、ダビデが残したいくつかの書簡も分析の対象とする。ダビデの活動を追うことは、ライシテ理解の定着・広がりによって女性たちが果たした役割を知ることになるだろうし、近代世界における宗教・信仰の社会的意義をジェンダーの視点から問うことにつながるだろう。

## ジェンダーと郊外—戦後日本における計画空間の誕生とその変容—

関村 オリエ

(群馬県立女子大学 文学部)

本報告では、戦後に計画空間としてつくられた郊外の誕生経緯と機能を整理し、近年生じている新たな郊外の変容について、ジェンダーの視点から考察することを目的としている。

高度経済成長期の日本では、地方から都市へ労働力として多くの人々が移動した。そのため、東京をはじめとする大都市圏では、人口増加とともに住宅不足が深刻な問題となっていた。これに対して、国や旧日本住宅公団、民間ディベロッパーによる宅地開発が行われ、大都市圏の郊外地域においては、一戸建ての住宅のほか2LDKなどの間取りに代表される集合住宅団地など、大量の住宅供給が行なわれた。郊外の宅地開発は、住宅不足の問題を大きく解消するものではあったが、経済成長の過程における「良質な労働力確保」を目的としていたため、郊外の住宅団地に移り住む住民たちは、世帯構成や入転居期など似通ったライフサイクルを有してきた。結果として、夫の勤める職場が立地しビジネス機能に特化した都心に対し、妻が家事に従事する家庭が立地し住機能に特化した郊外が誕生した。日本の大都市圏は、核家族世帯の家族役割を前提としながら、完全な職住分離の構造を成したのである。

西川（2003）によれば「計画性とは目的が明確なことに加えて、意図されていることである」という。その上で「郊外住宅は、住むこと、生きることそのものが、生産のための空間論理に従属している」ことを指摘する。計画空間としての郊外は、長年、異なる国籍、階級、またセクシャリティを持つ人々を排しながら、多様な社会・文化的要素を断絶し、均質的な核家族の規範により維持されてきた。しかし近年、人口の少子高齢化やグローバル化、新自由主義などの大きな変化の波により、郊外は過渡期を迎えている。本報告では、東京都の多摩地域や大阪府の豊中地域など、戦後造成された大規模郊外住宅地域を対象に、女性たちの地域ビジネスや男性たちの地域デビューなどを検討することで、そこで暮らす住民たちが既存の空間論理や空間のジェンダー秩序とどのように向き合い、乗り越えようとするのかを考察し、計画空間としての郊外の変容の可能性と課題について考察したい。

## 1960年代の韓国映画から見る女性幽霊表象

パク・ミギョン

(京都大学非常勤講師)

発表者の現在の研究テーマは20世紀の韓国の大衆文化のなかに見られる「鬼神（クイン）」表象の変遷について韓国社会の変化との対応関係のなかで明らかにすること、そして、鬼神表象の形成における日本文化からの影響について日韓関係の変化を踏まえつつ明らかにすることである。本発表では特に、1960年代における韓国映画に登場する鬼神を素材とする。なお、ここでは鬼神の「表象」という言葉を、鬼神の姿形（視覚イメージ）のみならず、鬼神の登場や動作に伴う音響や舞台演出なども含めた総合的なありようを指して用いている。

現代の韓国人がイメージする鬼神の典型的な姿は、女性、白い服、乱れた長い髪など、日本における典型的な女性幽霊の視覚イメージと同じ特徴を有しており、日本の影響が大きいと考えられている。先行研究においても韓国の鬼神が初めて視覚的に描かれたのは植民地時代の新聞・雑誌においてであったことが指摘されており、2019年に発表した拙論文でも植民地時代に朝鮮で上映された日本のホラー映画に登場する幽霊表象が後の韓国のホラー映画における鬼神表象の形成に影響を与えた可能性を提示した。

本発表では、1960年代の韓国ホラー映画のなかで女性鬼神が登場する代表的な作品として、66年の『殺人魔』と67年の『月下の共同墓地』を具体的に検討する。この2作品の主要場面の分析を通して、日本の江戸時代の怪談歌舞伎の代表作である『四谷怪談』の影響について分析し、併せて、日韓における幽霊／鬼神表象の比較も行う。

60年代は韓国映画の黄金期と言われており、海外映画が多数紹介されるとともに、韓国国内でも多くの映画が制作された。そのなかにはホラー映画も多く含まれており、それらの作品の監督のほとんどは（上記2作品も監督も含めて）日本での留学経験を有していることは注目に値する。また、60年代は朴正熙による軍事独裁政権期でもあり、66年8月3日の第2次映画法改正による表現規制や、67年4月1日に始まった韓国映画業者協会脚本審議委員会による自主規制などといった出来事も、ホラー映画における鬼神表象の形成に影響を与えた。例えば、検閲が強化された時期に制作された作品ではホラー映画であっても教訓的であることが重視されており、儒教的に理想とされる良妻賢母の女性が鬼神になることが多かった。